

## 症例報告を書く意義と方法

### 症例報告の意義

吉良潤一先生(九州大学神経内科教授)

「大学神経内科でしっかりと身に付けてほしいと私が願うことは、受け持ち症例を正確に記述する精神であります。症例を正確に記載し報告として残すには、詳細な観察とその診療録への記載、問題点についての考察、指導医とのディスカッション、患者・家族との適切なコミュニケーション、文献調査、現代医学の最先端情報の収集、そして忍耐強い経過のフォローが要求されます。若い間でなければ、このような精神は身に付かないと思います。ポストゲノムの時代にあっても神経学にとって最も大切なことは、症例の記述であると考えます。正確に記述された症例を持っていることが、より重要になる時代ともいえましょう。一例をおろそかにする者は、結局一例に泣くことになるのであります。」

中野今治先生(自治医大神経内科教授)

「歴史上、1 例報告から新たな疾患の発見・確立へと至った事例は数多く見られます。そのみでなく、貴重な症例の知見は個人あるいは一施設の経験に終わらせることなく広く世に知らせて、他の患者の診療に役立てる、これも我々の重要な責務です。」

池田正行先生(長崎大学創薬科学教授)

「自分の仕事を外在化させて、世間から厳しい評価を受けることで、自分の仕事の質を高めることができるのです。」

生水真紀夫先生(千葉大学産婦人科教授)

「正確に記載し記録を残すことで、他者の間接経験に資するという意義です。極めて珍しい症例ですから、多くの医師にとっては直接経験することはまずありません。万一にそのような症例に出会ったときに、すみやかに診断が出来るように準備しておくという意味合いもありますが、文献として記録されたものが、後に同様の症例に出会った医師の疾患の解析に資するという点が大切です。極めてまれな疾患ですから、皆で症例経験を共有し複数例の解析を可能にすることで、はじめて疾患特性や病態の解明を進めていくことができるようになるわけです。」

・稀な疾患、病態を有する症例を報告することにより、

[1] 新たな疾患単位を提唱する(アルツハイマー病、パーキンソン病、Pick 病、MELAS、Vit E 欠乏脊髄小脳変性症[Yokota et al]等はもともと症例報告!!)。

[2] ある疾患の新たな特徴を明らかにすることでその疾患(診断、病態、治療等)に対する読者の理解が深まる。

[3] ある疾患の病態解明に結びつく(メカニズムの解明が不十分で、事実のみの記載であっても、その報告が元になり、将来的に解明されることもある。Vit E 欠乏脊髄小脳変性症も当初は「idiopathic」として報告され後に遺伝子異常が明らかにされた。)

p.s. メカニズムの解明が不十分という理由で簡単に症例報告作成を断念しないこと。

掲載に値するかどうかは最終的にはあなたや指導医が決めるのではなく、journal の editor と reviewer が決める!!。

[4] 同様の病態、疾患を有する患者の診療(診断、治療)に寄与する。

- ・その他の理由

- ・指導医から「書きましょう」と言われた。
- ・自身がしっかりした診療をしていることの証とする。
- ・自分の業績をつくる。

- ・症例報告は臨床医にしか書けません(基礎研究者には書けません)。臨床医が書かなかつたら症例は埋もれるのみ。

- ・臨床的意義がよく分からない(いつ、どのように臨床応用できるかわからない)研究論文よりも臨床的にはよほど意義がある。

- ・大学病院の特性:一般病院では診断、治療の難しい症例が集まっている。→多くの症例に記載の価値がある。

- ・n(患者数)が大きくなると意義がないという誤解

→「nが大きくなるともの言えない study」と「1例でも記載の意義がある症例の報告」は次元が異なる。一方、「1例でも記載の意義がある症例」を2例以上でまとめた場合、original articleとして採用してくる場合がある。

- ・稀な症例を記載しても意味がないという誤解

→ごきぶりを一匹みつけたら実際には十匹いる。

## 2. 症例報告を取り巻く環境

「impact factor 至上主義」により年々厳しくなっている。

症例報告は研究論文に比べ引用されにくいいため、英文誌の場合、症例報告を数多く掲載すると journal の impact factor が下がるとされている(Acta Neuropathol 115:269-271, 2008)。

impact factor は学術誌および個人業績の評価のため重要な指標の一つではあるが、[1] review を多く掲載する、[2] 引用されにくい論文を regular article ではなく letter 等で掲載する、等の操作により上がることも指摘されている(case report を letter で受理する journal は増えている)。

現実には

- ・一流誌では症例報告を受理しない傾向。

- ・一流誌以外でも症例報告の受理(Accept)へのハードルが高くなっている。

→投稿する Journal を選択する際には、Journal の web site をチェックし、case report をある程度掲載している(=case report を重要視している)ことを確認する必要がある。

- ・邦文誌への報告について

- ・これまで論文作成をしたことがない場合に考慮(練習)

- ・英文にする暇がない場合に考慮

残念ながら

- ・Impact factor がつかないため評価されにくい。

- ・海外の人が読めない。